## 上田宜珍

更に歴史家・産業家・科学者・文学者などの顔を持つ上田宜珍は高浜村庄屋としての行政家であり

マルチタレントである

庄屋として村政・郡政に尽力する一方

高浜焼・漁業などの産業振興をはかり

陶山経営では「陶山遺訓」を著し加藤民吉に秘法を授ける

天草の郷土史を研究し

伊能忠敬に測量術を学び

高浜村大火後の復興に活かす

「天草風土考」「天草年表事録」の歴史書を刊行

天草歴史学の元祖である

歌道を学び 歌人としても大成

「天草島長歌」「嶋の藻屑」と天草初の歌集を編む

これらは『天草嶋鏡』として纏められ

後世の歴史研究家のバイブルとなっている

文政十二年(1829)七十五歳で病没

戒名は「俊倫謙山良温居士」高浜村荒尾山下の墓地に眠る



上田宜珍 像 「天草島鏡

## 上田宜珍の履歴と事績

前は源作のち源太夫、宜珍は号。 五代庄屋伝五右衛門の二男として生まれた。(長子は二歳で早世)名上田宜珍は宝暦五年(1755)十月二十五日に、天草郡高濱村第

あえて述べると。 真田昌幸の久度山潜居については、多く語ることもないだろうが、安房守昌幸に従って、紀州高野山下の九度山に蟄居していた。この野氏と称したようである。慶長五年父左衛門尉政茂とともに、真田上田家の祖は助右衛門正信である。始祖は根津氏と称し、更に滋

こ。 舅である本田忠勝の必死の除名嘆願で、死を免れ久度山へ蟄居となっ 舅である本田忠勝の必死の除名嘆願で、死を免れ久度山へ蟄居となっ が、徳川から恐れられた真田昌幸は、死罪は免れ得ない所であった 昌幸は豊臣方に組した。関ヶ原の戦場へ向かう秀忠軍を翻弄するな 豊臣、徳川の天下分け目の戦いと言われる関ヶ原の戦いで、真田

じて大坂を脱出し、天草へ隠棲する。る。冬の陣に続いて起きた夏の陣で、大坂城は落城し、正信は辛う久度山を脱出し、大坂へ駆け付けた。その中に、正信もいたのであ、かがて、大坂冬の陣が始まる直前、昌幸の二男信繁(幸村)は、

なんだものである。 上田助右衛門と名を改めた。苗字の上田は、郷里信州の上田郷にち、天草高浜をなんで選んだのか分からない。高浜に逃れた正信は、

**天領天草の代官、鈴木伊兵衛重辰は万冶元年(1658)八月、** 

屋、上田家の租であり、その後代々庄屋が受け継がれた。上田家第二代勘右衛門定正(定信の子)に庄屋を命じた。これが庄

た優秀な人材(血筋)を求めてのことだったろうか。だ。あえて言えば、大坂の陣から43年も過ぎて居たこともあり、まうより、かつて徳川に背いた上田氏に、庄屋職を命じた経緯も不明重辰がどのようにして、上田氏を見出したのか分からない。と言

さて、宜珍は、初代高浜村庄屋から六代目となる。

たのは、寛政元年(1789)、34歳の時である。 庄屋見習いになったのは、33歳の時であった。そして庄屋となっ

で、世は宜珍を必要とした。できず、庄屋後見役を仰せつかったりで、文政十二年に亡くなるまできず、庄屋後見役を仰せつかったりで、文政十二年に亡くなるま職にあること29年、文政元年(1818)隠居したが、完全隠居は

定していたが、間もなく、波乱の世の中を迎えようとしていた。らも約120年が経過し、戦国の気風はすっかり姿を消し、世は安徳川幕府が成立してから、すでに150年、あの天草島原の大乱かるれでは、宜珍が生まれた当時はどんな時代であったのだろうか。

書を編んだり、 代に入り、江戸文化が花開く時期でもあった。 行など、人々の暮らしは苦しくなる一方であった。 惑と言われる地変や、異常気象、 の中にありながら、 全国的には、天明の大飢饉が発生し、天草でも島原大変、 心休まる時はなかったであろう。 文化面でも、 歌道を学んだり、 超 流の活躍をした。 人口過剰、 しかし、 「天草風土考」 銀主の台頭、 一方、 宜珍も、 庄屋宜珍にとっ 文化文政の時 という歴史 繁多な行政 疱瘡の流 肥後迷

## 行政家としての宜珍

譜には文化四年となっている) (1789) に庄屋となり (35歳) 、 宜 珍は安永7年 文化五年、 1 7 7 8 大庄屋格(一代限り)に列し、 24歳で庄屋見習いとなり、 父が開発した高浜焼窯元も引 帯刀御免 寛政元年 (近代年

題にも取り組まねばならなかった。これは、 現在の市町村長と違い、村政のみならず、 る仕事も多かったようだ。大変な激務であった。 たためである。特に、宜珍のような有能な庄屋には、 庄 も受け持っていた。さらに一村の事だけでなく、 屋というのは、 現在でいう市町村長といったところだろうが、 収税、 郡役所に役人が少なかっ 警察や司法 仰せ付けられ 郡全体の諸問 (初歩

庄 屋として取り組んだ主な案件は次のようなものがある。

- 1 宗門心得違い事件の対応。文化二年(1805)、 その事件調査に苦労・尽力した結果、 大江・高浜の四カ村で異法心得違い(潜伏切支丹)が発覚: (天草崩れ 事なかれに終わる。 今富・ 﨑 津
- 2 漁業権の獲得。 ために漁業権を獲得した 幸い他の定浦の株が売りに出されていたのを獲得、 のため、 定浦の下請け程度しか漁業に従事できなかったが 定浦制度下で高浜村は漁業権がなかった。 漁民の そ
- に罹 高浜村に疱瘡が大流行した際の処置。 育に頼み、 病者は 死の病として恐れられていた。 隔 180余名に及ぶ。 離山 小屋に遣わし、 当時、 治 療に当 宜珍は、 文化四年から翌春まで 疱 瘡はコレラととも 「たる。 医 師 その 0 )宮田賢 ため

3

沢山  $\mathcal{O}$ 人の 命を救う。

- 4 の庄屋22人の一人として奔走する。 している百姓を救う徳政令である。 百姓相続方仕法の実施。 同仕法は、 銀主に田畑を取られ 幕府 よりこの 加 が役を他 困窮
- (5) だが、この業務を凶作の時でも、 庄屋の一番の役目は、年貢を滞りなく納める差配をすること お上より褒賞を受けている。 督励相納めたとして、 度々
- 6 ぼ全ての行程に随行した。ただ接待をしただけでない 天草測量を実施した。 量方として全国測量をしていたが、文化七年 伊能忠敬の測量に随行・測量術を学ぶ。 宜珍の非凡なところでちゃっかり?測量術を学ぶ 宜珍はこの接待役の一人として、 伊能忠敬は幕  $\widehat{1}$ 8  $\frac{1}{0}$ 府の のが ほ 測
- 7 理 測量術を生かし、 この大火後の村再建にあたり、 起きた。 文化十一年(1414)高浜村で115軒も焼失する大火が や往還を方形に整備した。 宜珍の役宅も八幡社も焼け、 延べ7千500人を動員 宜珍は、 面焦土と化した。 伊能忠敬に学んだ 町 0 区 画

#### 産 家としての宜珍 陶山経営と高浜焼

この陶山を開 高浜村には、 宜珍は、 浜村は、 発し、 父の 現在でも日本一の高品質を誇る陶石が産出するが、  $\blacksquare$ Щ 焼き物を始めたのは、 の陶山経営を引き継ぎ発展をはかる。 辺鄙なところで、 宜珍の父伝五右衛門であ 陶石を販売するにも製

高

天草でも

西

0

す。また、陶石の販売にも、努力する。しかし、それにもめげず、様々な努力も重ね、優れた製品を産みだ品を出すにも、交通の利便に恵まれていないことがネックである。

ある。 貧しい百姓たちのために為したことで、 営の発展を計る。これらの努力は、宜珍の個人的利益の為でなく、 吉の故郷の縁を頼って東向寺の天中和尚の仲介による。 (磁器)の秘法を探るため、 更に宜珍が偉いのは、 経営にも力を注ぎ、 文化四年、 後に尾州瀬戸焼の中興となる加藤民吉が、 「陶山永続方定書」「陶山遺訓」を著し、 他国の焼物師に秘伝を伝授する心の広さで 宜珍の窯に修業に入る。これには 天草初の産業人といえよう。 南京焼 民 経

興の祖とよばれるが、宜珍こそ中興の祖師そのものである。法)を伝授する。民吉は、この技術を瀬戸焼に生かし、瀬戸焼の中そして、民吉の熱意にほだされ、ついに南京焼秘伝(赤絵錦手秘

## 「天草島鏡」「庄屋日記」を著す。 **文学者・歴史家としての宜珍**

劣る資料収集の条件下で、 珍と雖も、 0 からの史料に基づかねばその知識は得られない。 を集成して『天草嶋鏡』を編纂した。と言えば簡単だが、いかに宜 )史料の収集が出来たのか。 歴史書としての「天草風土考」「天草年表事録」等を著し、 宜珍は、 庄屋としての激務の傍ら、 元より歴史についての知識があったわけではなく、 かも辺鄙な村に於いて、 儒学・国学・歌道を学ぶ。 今日よりはるかに 如何にしてそ 史料 古来

苦労して得たであろう断片的な史料を元に、一つの体形的な天草

史を編んだ宜珍、恐るべき。

比べることは乱暴だが)
及ばなかったかもしれない。(などと想像するほど。もっとも平賀氏と宜珍の非凡さ。博識者と言われる平賀源内などは、宜珍の足元にも今日の学者でも難しいことを、繁多な行政職の傍らに成し遂げた

#### 文人としての宜珍

収録)。(「嶋乃藻屑」は上田宜珍傳、「天草島長歌」は天草島鏡にを遺した。(「嶋乃藻屑」は上田宜珍傳、「天草島長歌」は天草島鏡にさらに歌人として歌集「嶋乃藻屑」及び「天草島長歌(三篇)」

天は二物を与えずというが、時として、二物どころか数物を与え

ている。

上手いのか下手なのか判断できない。ろの和歌である。ただ、残念ながら、筆者にとって、宜珍の詩が、その数物を与えられたのが宜珍。宜珍の文学は、現在でいうとこ

定が、当時の64歳はいつ死んでもおかしくない時。 をの太平に師事したのが、何と宜珍64歳と言うから恐れ入る。今日 をの太平に師事したのが、何と宜珍64歳と言うから恐れ入る。今日 をの太平に師事したのが、何と宜珍64歳と言うから恐れ入る。今日 をの太平に師事したのが、何と宜珍64歳と言うから恐れ入る。今日 をの太平に師事したのが、何と宜珍64歳と言うから恐れ入る。今日 をの太平に師事したのが、何と宜珍64歳と言うから恐れ入る。今日 をの太平に師事したのが、何と宜珍64歳と言うから恐れ入る。今日

して教えを受けることはできなかった。つまり、今日でいうところし、注目すべきは、天草の西岸の辺境の地にいる宜珍は、当然面接渋江宇内、 歌人田中忠雄等、多くの人に就いて学んでいる。ただ「宜珍は太平に学ぶ前に、熊本藩校時習院の教授藪孤山や高本紫溟、

の通信制度、飛脚が発達していたことが分かる。の通信教育による授業であった。別の見方をすれば、当時でも相当

には、 白雲のかゝると告げよ峰の松風」の辞世の句が刻まれているという 富 岡の寿覚院西生庵跡にあり、 石 お、 寛政地変の供養塔も建っている。 碑は劣化剥離し読むことはできない。 田中忠雄は、 天草富岡 その碑には「わが跡を問ふ人あらば の人で春秋亭と号した、 (苓北町史) 彼 西生庵跡  $\mathcal{O}$ 墓碑 は

が、凡人の悲しさである。 ただ、宜珍の遺した歌を読んでも、悲しきかなよく理解できないの

### 特筆すべき庄屋日記

の我々に対する、贈物とも言える貴重な歴史資料である。家文書」が残されているが、その中でもこの庄屋日記は特に、後世を残していることである。上田家には、膨大な文書いわゆる「上田さらに特記しなければならないのは、「天草郡高浜村庄屋日記」

れている。残念ながら数年間の日記は失われているようだ。ら隠居する文政元年までの26年間の庄屋としての公私の記録が綴らこの日記は宜珍が庄屋になって4年後の寛政五年(1793)か

だが、 行 この日記の原書は勿論閲覧できない 0) 故平田正範氏の 籍 に ょ 0 て、 翻刻・天草町教育委員会(天草市合併 我 Þ で も読 むことが 仮に閲覧しても解読不能 出 「来る。 ただ、 前 全 20

> ば、 ₩ た め、 に 図 ŧ 書館 筆者の手 お ょ で読 び、 むことは 元に 全 冊 は数冊 を手に 可 能だ。 しか 入れることは資 な ただし、 金 0 読 面 ŧ で う 不 と思え 可 能  $\mathcal{O}$

関する部 れ ている。 伊 能 測量隊 分を抜き出 当書にも、 巡 廻 日 している。 記 巡廻 ţ この 日 記 翻 0 他 刻 に、 日 記 庄  $\mathcal{O}$ 屋 文 化 日 記 七 年 か 6 に 測 収 量 録 さ

ょ り、 翻 刻とは 目を通すだけでも、 ζ) え、 少 々読 みづらいことは 当 時の様子が彷彿としてくる。 あ るが、 読 む لح 1 う

歴 田 な 史日 この 功 史 日 料 記 記 平 であ と言えば、 「上田宜珍日 井 لح 建治氏 る。 ١ ر えよう。 この 5 山 0) 江間 方番 記 努 力で、 役の 日 記 「江間 ŧ 江 翻 間 刻本が 故 日 新五右 記 松 田 出版されてい 0) 唯 雄、 二つが、 衛門日記」も 森下 天草二大 安雄 、 る。 貴 重 松

#### 上田宜珍墓碑

による叙文が刻まれている。 生家を見下ろす荒尾山下の墓地に眠る。その墓石には、大城允宜珍は、文政十二年(1829)九月二十五日歿(享年七十五歳)

#### 俊倫院謙山良温居士

及衣服以報其労寛政十一年侯賜謁見文化五年賜銀十枚許侃刀班藪子也天草旧隷島原寛政中島原侯褒其治績賜銀若于後数賜金銀乎翁為高浜里正也務察民瘼興利除害民蒙其沢蓋有得之於我孤山昔賢有言曰一命之士苟存心於愛物於人必有所済者夫上田翁之謂

有五 里民 撰鰒玉集也載翁之歌数十首梓行于世翁集其所詠曰島藻屑本居氏 以文冠其首所著有天草風土考文政十 豊秀頼保大坂城城陥 嶼石之挿花缻及其台以報之翁諱宣珍称源太夫姓上田 王之裔居信濃者有以袮津為氏者是其先也其後上田助右衛門者属 之長﨑奉行亦賜銀八枚翁之父諱武弼始陶於高浜至翁甆器益 大保長蓋 敦 法諡 ;厚若而好学受業於孤山藪子後学和歌及国学於本居氏本居氏 .賴以為生者多矣文化十年献其甆器我  $\exists$ 俊倫院銘 台府之命也後天草隷長崎代官代官亦賜金及上下 日く 元 和三年来天草居高浜翁之七世之祖也翁為 一年九月廿五日終享年七 少将老公 本姓滋野 公喜賜 服 精 親 白 緻

敦篤好学 以身導民 就利除害

懐其慈仁 旁好和歌

医遊終身 惟諷惟詠 月夕花晨

志尚之高 実吏隠倫

以銘貞石

令名不泯

大城允撰

# 俊倫院謙山良温居士(上田宜珍)碑銘解釈(後半)

元和三年天草に来たり高浜に居る。

翁の七世の祖也。

翁人と為り敦厚。

本 若 T 世 居氏に学ぶ。 くして学を好み。 に辞 行 せ り。 本 居氏 翁 業 其 鰒 0) を 詠 玉 孤 集 ず Щ える所 を撰 [薮子に を す ご受く。 集 る 8 B 島 翁 後  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 藻 歌 和 数 屑 歌 + 及  $\Box$ 種 び 玉 Š を 学 載 本 せ を

> と銘に日 政 氏 十二年 文を 以 九 0 て其 月 十 0 五. 首 日 に 終 冠 わ せ る。 り。 享 著 すところ天草 年 七 · 有 五 風 法 土 諡 を 考 有。 俊 倫

居

き。 0 れ 敦 諷 厚 貞 其 に L 石 惟 L  $\mathcal{O}$ に銘す。 て学を 慈 れ 詠 仁 にに懐 ず。 好 令名泯ず。 月夕花晨。 み。 傍ら 身 を 和 以 志 歌 0 て 尚 を 民  $\mathcal{O}$ 好 高 み。 を き。 導 悠遊 き。 実に 身 利 吏 を に 0) 終 就 隠 わ き る。 害 倫 を

以惟

除

院文



上田家墓地より眺めた高浜現景 正面奥が上田庄屋屋敷

#### 上田宜珍略年譜

宝暦 四年(1754) 父勘右衛門、砥石山採石を始める。

宝暦 五年(1755) 十月二十五日、高浜村庄屋上田家に生まれる。

宝暦十二年(1762) 父傳五右衛門、鷹巣山で陶磁器製造を始める。

巨(して3)3歳、高兵寸巨是乱暑、こなる。

七年(1778)23歳 高浜村庄屋見習いとなる。

安永

傳五右衛門、長崎出島で高浜焼の販売を始める。

四年(1792)37歳 島原藩主より褒美として銀5両下賜される。

寛 寛 政 政

元年

(1 7 8 9)

34 歳

高浜村庄屋

(六代目)となる。

(上田家としては七代目)

雲仙眉山崩壊・被災者救助の為、大麦を集めて、栖本組、大矢野組に送る。

(1794) 39歳 宜珍の父、傳五右衛門(六代目庄屋)死去。

(1797) 42歳 島原藩主より御杯御肴を頂戴する。

寛 寛 寛 政 政

九年

八 六 年 年

島原藩主より天草郡巡視の節銀子3両賜る。

(1798) 43歳 ご褒美として銀34匁賜る。

寛政

十年

雲仙崩れによって高浜に流れ着いた流死者を海岸に仮埋葬していたのを隣峰庵に埋葬し、 篤く供養する。

日田代官俵物御用の御廻浦の案内役を仰せ付けられる。

(1799)4歳 松平主殿守より前年の日田代官の案内の功により銀3両賜る。

寛政十一年

より村治上の功労に付、福連木村庄屋尾上文平と共に御紋付拝領する。

島原城にて松平主殿頭御目見得仰せ付けられる。同時に金子2百疋賜る

寛政十二年(1800)45歳 天草風土考編纂に着手する。

享和 元年  $\begin{pmatrix}
1 & 8 & 0 \\
0 & 1
\end{pmatrix}$ 46 歳 焼物山事業継続願出す。 運上賃48匁にして来年より13年間とする。

今富村庄屋兼務を仰せ付けられる。

二年  $\widehat{1}$ 8 0 2 47 歳 城木場村松山氏子の順 郎 (信親) を養子とする。 宜珍の娘佐保と婚姻

享和

宜珍の弟友三郎・定温(宜珍に子無きのために養子となっていた)に今富村庄屋仰せ付けられる。 米相場の儀に付き、 御領組庄屋長岡五郎左衛門、 津留村庄屋蓑田文三郎と共に富岡より熊本へ渡る。

#### 「天草風土考」編纂終了

儒学の師藪孤山 (時習館教授) 没す。

三年  $\begin{pmatrix} 1 & 8 & 0 & 3 \\ 0 & 3 & 0 & 3 \end{pmatrix}$ 48 歳 年貢米俵拵米仕立て入念かつ升目正しい等で褒美として銀3両賜る。

享和

文化

文化

元年  $\begin{pmatrix} 1 & 8 & 0 & 4 \\ 0 & 4 & 0 & 4 \end{pmatrix}$ 49 歳 去年夏の水害による損所の修理に力を尽くしたことで金2百疋を褒美として賜る。

加藤民吉、 東向寺の天中和尚を介して、宜珍の製陶工場への入所を受け入れる。

**大江村・崎津村・今富村に於いて異法心得違い**の者ありとして、松平兵庫頭より取調べ掛を命じられる。

高浜村に於いても異法心得違いの者取調べに苦心する。

お拂米に付いて最も力を尽くしたとして、金2百疋賜る。

運上金50目を出し高浜村民のため漁業権を獲得する。

(従来の漁場は﨑津村の下稼ぎにして、﨑津村に運上賃を出して漁業に従事していたため、 甚だ不便であっ

三年 1 8 0 6 51 歳 村治上の功績大及び旦那方紛擾に際し実直に取り計らった功により、 銀5両賜る。

高浜村の川を小川に至るまで測量。 及び近村等への里程を測量改める。

 $\begin{array}{c}
1\\8\\0\\7
\end{array}$ 52 歳 高浜村庄屋としての功労、 功績に対し金百疋賜る。

文化

四年

文化

また、 昨年の凶作にも拘わらず、年貢米等督励に努めたとして褒詞賜る。

瀬戸の陶師加藤民吉に、 南京焼の秘法を授ける。

ミカン及びミカンの木を島原候へ献上したことにより、 富岡役所より金2百疋賜る。

高浜村で大流行した疱瘡患者の救済のため、 医師宮田賢育を頼み、その救護に尽力する。

村治はもとより郡中の紛擾を大庄屋と合わせ力を尽くしたとして、

金百匹賜る。

文化

五年

52 歳

庄屋として能く精勤し、

潜伏切支丹の検挙に功ありとして、 白銀10枚を賜り、 佩刀を許され大庄屋格に列せられる。

石山採掘を願い 出る。 これは困窮の百姓に耕作の余暇に産業を与えるためである。

砥

文化 六年  $\begin{pmatrix} 1 & 8 & 0 & 9 \\ 8 & 0 & 9 & 9 \end{pmatrix}$ 54 歳 疱瘡大流行に際し、予防・治療に苦心して多大な力を尽くした功により、 銀1枚を賜る。

「天草風土考」末尾に島原の儒者松野本枝跋文する

七年  $\begin{pmatrix} 1 \\ 8 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ 55 歳 『陶山永続定書』を規定し『陶山遺訓』を著し、高浜焼きの発展繁栄を図る。

文化

測量方一行伊能忠敬ら薩摩獅子島より大多尾村に来島。 **幕府測量方伊能忠敬らの来島**に付き、その打ち合わせの為、 その後53日間の、 中原新吾とともに薩摩串木野、 忠敬測量に随行し、 甑島に渡る。 測量術を学

ڿ

右功労により、 島原候より金子2百疋賜る。

高浜村の山谷海辺の方位間数等調査し、 同村地図を作る。

八年 1811 56 歳 伊能忠敬測量に功ありとして、金2百疋賜る (島原公よりも賜りありとして些少)

文化

普請役の浦々取り調べ (唐への俵物輸出) 東筋廻村に同行。

天草郡各庄屋の帯刀願いのため島原公に陳情する。

文化 九年  $\begin{pmatrix} 1 \\ 8 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}$ 57 歳 村治上は勿論、 郡内のもみあい等にも常に関係し、 円満に解決した功少なからずとして金百疋賜る。

御仕法出精相勤めたる功により、 金2百疋賜る。

国学の師高本紫溟 (時習館教授) 没する。

文化

十年

1813

58 歳

村治上の功績はもとより、

郡中の諸事を大庄屋と協力して解決した功等により白銀5両賜る。

文化十一

年

 $\begin{pmatrix} 1 \\ 8 \\ 1 \\ 4 \end{pmatrix}$ 

60 歳

高浜村大火。

宜珍自宅も焼ける。

類焼総数115

軒

甕器高浜焼きを細川老公に献じる。

焼け跡の整備をして区割りを整備 往還筋を縦横に定め、 宅地を整備。 焼失した高浜神社を高台に移転。

工事に要した人夫7千473人。

宜珍と懇意の菊池の儒者渋江松石 (宇内) 死去。

文化十三年 1 8 1 6 61 歳 本戸組枦宇土村の枝郷海老宇土の隣郷7か村との山林係争中のところ、 宜珍の苦心斡旋により示談解決する。

右件に功有りとして金2百疋賜る。

文化十四年 1 8 1 7 62 歳 陶土を採掘して他国への 販売を願い出る。

文政 元年 1818 63 歳 大江組大庄屋に松浦平八郎が相続したが、 宜珍がその後見役を仰せつかる。

理 由は、 異法信仰の恐れありと、 唐船紅毛船等の渡来することによる。

庄屋役を信親に譲り隠居。 庄屋役30年。 ただし、 後見に努めるよう仰せられる。

※信親は宜珍の養子にして、 宜珍の娘佐保の夫。

 $\begin{pmatrix} 1 \\ 8 \\ 1 \\ 9 \end{pmatrix}$ 64 歳 本居太平 (本居宣長の猶子) の門に入り、 国学・歌道に精進する。

天草郡村々の砲台建設に付献金した褒美として銀7枚賜る。

休息所安戸を作り移住する。これより後見役となる。

 $\begin{pmatrix} 1 & 8 & 2 & 0 \\ 2 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ 65 歳 今富村庄屋定温、 嫡子定行(16歳)に役を譲り致仕する。

文政

三年

文政

二年

文政 四年 1 8 2 1 66 歳 﨑津村庄屋吉田龍太郎若年に付き、 後見役を命ぜられる。

文政 六年  $\begin{pmatrix} 1 & 8 & 2 & 3 \\ 2 & 3 & 3 \end{pmatrix}$ 67 歳 高浜村庄屋信親、 室佐保子の歿に逢い、今富村の庄屋定行と交代し、今富村庄屋となる。

高浜焼きを天草郡中に於いて一手販売することを願い出

る。 (高浜焼きの皿山維持困難につき、 郡中の産業を奨

励して郡民に授産の便を与えるため、

『天草嶋鏡』完成。 本居太平序文を贈る。

上田定温死去。

文政

八年

68 歳 74 歳

文政十二年

(1829)(1825)

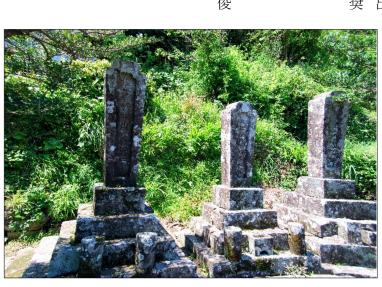
高浜村庄屋の後見役を辞す。

九月二十五日、 宜珍卒。 高浜村荒尾山下に葬られる。 俊

倫院謙山良温居士。

『伊能忠敬の天草測量と上田宜珍』 『上田宜珍傳』 天草近代年譜』 「上田宜珍伝 松田唯雄著 より 角田政治著

《原資料》



上田宜珍の墓(左) 中は妻、右は友三郎の墓 天草市天草町高浜

## 上田家・旧庄屋屋敷

十一年の高浜村大火で焼失し、その後再建されている。作広よし)」と記している。ただし、忠敬の泊まった屋敷は、文化上田庄屋屋敷に泊まった忠敬は、測量日記に「止宿庄屋源作(家

## 《屋敷説明板》 上田家の由来

(1815年) に建築されたものである。 この建物は七代目当主、上田源太夫宣珍の時代、文化十二年

耐えてきた。され、海からの強い西風や台風にはビクともせず長年の風雪にされ、海からの強い西風や台風にはビクともせず長年の風雪に家の材料は、シイ、マツなどの雑木を使い、がっしりと構築

的、建築学的にも実に貴重な文化財である。のである。このような旧役宅がそのまま現存しているのは歴史山を背景に斜面を生かした庭園は、天草の中でも第一級のも

(文化庁 登録有形文化財 第43-0031~0085号)



上田庄屋屋敷(役宅側)

天草市天草町高浜